SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

前近代の平野部地域における景観史と災害史の融合的研究：大井川流域を素材に

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2021-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 貴田, 潔 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00028038

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１３５２９

研究課題名（和文）前近代の平野部地域における景観史と災害史の融合的研究―大井川流域を素材に―

研究課題名（英文）A Study of the Local Landscape in Plain Areas and their Disasters in the Medieval and Early Modern Period

研究代表者
貴田　潔（Kida, Kiyoshi）

静岡大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：３０７５９０６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、自然と人間の相互関係を重視しつつ、景観史と災害史の融合を目指した。具体的にいえば、過去の災害を受けつつも、前近代の地域社会のなかでどのような景観が作りだされてきたのか、その形成過程の分析に主眼を置いた。
　補助事業期間のなかで、大井川流域（現静岡県）といくつかの他地域をフィールドに調査・研究を実施した。ここでは、九州地方の矢部川流域（現福岡県）や富士山南麓（現静岡県）なども議論の対象に含み込むこととなった。各地域では干魃・水害・地震・噴火など個別の災害のリスクにさらされていたことが想定されるが、その一方で生業の多様化や村落共同体の編成という形で社会的な対応がなされたと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は現代の景観が過去の災害を経てどのように形づくられてきたのかという問題意識から出発している。人間が居住する集落だけでなく、生業（稲作・畠作・伐採・狩猟・採集など）を営む耕地や山野河海の景観は、干魃・水害・地震・噴火など多くの災害の影響を受けてきた。また、人間自身による乱開発と資源の枯渇という視点も重要である。
　その一方で、災害というリスクに対して、人びとは生業の多様化や村落共同体の編成という社会的な対応を目指してきた。こうした自然と人間の関係史という点に本研究の重点が置かれたのであり、今後も地域に即した研究を蓄積していくことが望まれる。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the premodern relations between nature and human society. I did consider in particular the influence of natural disasters in rural landscapes and their impact on agricultural villages.
　Within the period considered for this project, I did performed some fieldworks and reached my conclusions regarding the fluvial area of the Oi River Basin (Now part of Shizuoka Prefecture) and other areas.

研究分野：日本中世史

キーワード：景観史　災害史　生業史　中世村落　稲作　畠作　大井川流域　富士山南麓

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究の背景として、近年高まりを見せる環境史研究の進展が挙げられる。そして、これまでの研究の潮流としては、主に景観史と災害史の２つがその柱になってきた。

前者の景観史研究では、過去に人間が生業・生活を営んできた空間として、主に荘園・村落の景観が分析されてきた。なお、中世史の分野では、山野河海の資源の枯渇・管理といった問題も注目されている。このような理由から、景観の形成過程に関連して、自然と人間の相互関係が重視されるようになってきた。

一方、後者の災害史研究では、文献史料から干魃・水害・地震などの実態を探り出し、またそうした災害に対する社会の対応を明らかにしようと取り組まれてきた。

そして、こうした景観史と災害史の２つの潮流を融合させることを主眼に、研究代表者は本研究を実施した。

２．研究の目的

（１）平野部地域における景観史研究の必要性

本研究は大井川流域（現静岡県）の扇状地・氾濫平野を主たるフィールドに、景観史研究と災害史研究の融合を試みたものである。このフィールドは河川が乱流しがちな平野部地域にあり、前近代を通じて水害の影響を受けやすい地域であった。

一般的にいえば、扇状地・氾濫平野では水害などの災害を受けやすく、地形もその影響から大きく改変されやすい。しかし、こうした平野部地域では、その可変性からか、景観分析やその基盤となる現地調査が山間部地域に比して十分に進んでいない。

そこで、平野部地域の景観の形成過程を分析することに、本研究は最大の目的を置いた。つまり、地形の改変を伴うほどの災害を受け続けてきた扇状地・氾濫平野は、研究の対象として軽視されるべきでなく、こうした災害が広域的な景観にどのような影響を与えてきたのかを明らかにすべきと考えた。

（２）災害史を踏まえた景観史研究の構築

さらに、こうした問題意識を押し広げ、景観史研究と災害史研究の融合を図った。

平野部地域に限らず、現代の景観は前近代のそれがそのままの形で受け継がれているわけでない。水害・地震・噴火などの大規模な災害によって、歴史的にあらゆる地形は改変されつづけてきた。さらに、人間の側もそれに対応する形で集落の位置や灌漑体系などを変えてきた。そのため、過去の災害とそれに対する人間の側の対応を景観形成の重要な因子として理解した。

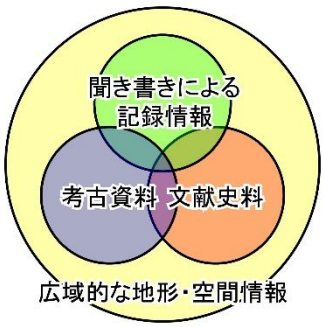
こうした問題意識から、本研究は景観史研究と災害史研究の融合をもう１つの目的とし、自然と人間の相互関係のなかで形成されてきた景観の歴史を復原することを試みた。

３．研究の方法

（１）大井川流域における調査・研究

上記の通り、本研究では景観史と災害史の融合を図ったが、文献史料に現れる局地的な景観や災害の情報は、より広域的な地形・空間情報のなかで読み解かれるべきと考えた。

また、文献史料だけでなく、聞き書き・踏査の記録や、考古資料から得られる諸情報も、景観の形成過程を探る上で有効である。これらの諸情報を有機的に組み合わせ、さらに広域的な地形・空間情報の上で読み解くことを試みた（図１）。



【図１】景観の形成過程を復原する上での諸情報の複合的な活用（概念図）。

（２）他地域における調査・研究

さらに、大井川流域の地域性を相対化させるために、他地域の調査・研究も若干ながら並行的に進めることとした。

具体的には、大井川流域と同じく扇状地・氾濫平野の特色を持つ九州地方の矢部川流域（現福岡県）の研究と、火山性の黒ボク土を主体とする富士山南麓（現静岡県）の調査・研究を中心に進めた。

４．研究成果

（１）大井川流域における研究成果

本研究では大井川流域を主たるフィールドに現地調査を実施した。

具体的には、遠江国初倉荘故地を主な対象とし、踏査をおこなった。残念ながら聞き書きの蓄積については十分とは言えなかったものの、1/2,500 および 1/10,000 都市計画図を入手し、さらにゼンリン住宅地図を用いつつ用水・排水の現況を目視し、地図上に記録した。

一方、史料読解について述べると、『静岡県史』に収録された初倉荘関係の中世史料のほか、『島田市近世初倉史料』に収録された近世史料を読み進めた。大井川右岸に位置する初倉地区に関しては、近世の水害と復旧・防災をめぐる史料が多い。そして、今後の課題となるが、こうした災害史料を、現地調査の成果にもとづく地理的情報と結びつけることで、地域における景観形成のあり方を論じることが可能となる。

なお、本研究のテーマである景観史と災害史の融合という問題に関連した書評として、貴田潔「「荘園・村落史研究会編『中世村落と地域社会―荘園制と在地の論理―』」（『民衆史研究』94、

2018）を発表した。平野部地域に見られる河川の氾濫の問題を取り上げ、景観史研究と災害史研究を接続させていく必要性に触れた。特に、歴史的にみて災害による地形の改変を受けやすかった平野部地域の問題を、景観史研究のなかにどのようで位置づけていくべきかを課題として提起した。

（２）他地域における研究成果

その他の地域に関しても、いくつかの現地調査と論文発表の形で成果が得られた。

第 1 に現地調査については、2019 年 7 月に富士山南麓の精進川地区（現静岡県富士宮市）で実施した。こちらは第 57 回中世史サマーセミナー（事務局住所：静岡大学人文社会科学部貴田潔研究室）の開催に先立った現地調査であったが、稲作のみに依拠しない農村のフィールドワークとなった。同地区の土壌は火山性の黒ボク土を主としており、また丘陵上の用水源も限られたものであった。前近代の社会において稲作に適した環境とは必ずしもいえない。

そして、同地区周辺の中近世史料からは、稲作（米）だけでなく、畠作（定畠・焼畑、大豆・柿）、林業（建築材・燃料）、採集（カワノリ）など多様な生業に従事していた人びとの姿が見えてきた。このように稲作のみに頼らない生業の多様化は、噴火・干魃の災害が想定される村落でのリスクの分散としても評価できよう。

第 2 に、論文としての研究成果の発表が挙げられる。補助事業期間の成果として、①「筥崎宮と荘園制」（九州史学研究会編『アジアのなかの博多湾と箱崎』〈アジア遊学 224〉、勉誠出版、2018）、②「筑後国水田荘の開発と「村」の枠組み」（海老澤衷編『よみがえる荘園―景観に刻まれた中世の記憶―』、勉誠出版、2019）、③「中世の駿河湾にみる塩業と森林資源」（静岡大学人文社会科学部・地域創造学環編『大学的静岡ガイド―こだわりの歩き方―』、昭和堂、2019）の 3 本の論文を発表した。

具体的に述べると、①では、筑前国筥崎宮を素材にその荘園制的領有構造の形成を論じた。②では、矢部川流域の扇状地・氾濫平野における筑後国水田荘（現福岡県筑後市）の開発と村落構造を論じた。これは、同じく扇状地・氾濫平野に位置した遠江国初倉荘の景観形成を理解する上で、重要な比較対象となった。最後に、③では、中世の駿河湾岸の海村で広く塩業が営まれており、さらにそれにともなう燃料の確保のために、森林伐採がおこなわれていたことを指摘した。つまり、人間の生業が中世の環境に大きな影響を与えていたといえる。このことを本研究のフィールド周辺で明らかにできたのであり、景観史・災害史の観点からみても重要な成果となった。

以上の（１）（２）で確認したように、補助事業期間を通じて、大井川流域といくつかの他地域で調査・研究を進めることができた。今後、本研究で取り扱った各地域の事例を比較するなかで、景観史研究と災害史研究の融合をさらに推し進められるだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 貴田潔	４．巻 -
２．論文標題 中世の駿河湾にみる塩業と森林資源	５．発行年 2019年
３．雑誌名 静岡大学人文社会科学部・地域創造学環編『大学的静岡ガイド―こだわりの歩き方―』（昭和堂）	６．最初と最後の頁 43-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 貴田潔	４．巻 -
２．論文標題 筑後国水田荘の開発と「村」の枠組み	５．発行年 2019年
３．雑誌名 海老澤衷編『よみがえる荘園―景観に刻まれた中世の記憶―』（勉誠出版）	６．最初と最後の頁 357-382
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 貴田潔	４．巻 -
２．論文標題 筥崎宮と荘園制	５．発行年 2018年
３．雑誌名 九州史学研究会編『アジアのなかの博多湾と箱崎』〈アジア遊学224〉（勉誠出版）	６．最初と最後の頁 54-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 貴田潔	４．巻 94
２．論文標題 〈書評〉荘園・村落史研究会編『中世村落と地域社会―荘園制と在地の論理―』	５．発行年 2018年
３．雑誌名 民衆史研究	６．最初と最後の頁 49-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考